

宮城県石巻測候所による昭和三陸地震津波の現地調査報告 —報告書3種の関係性を中心に—

松岡祐也 (宮城県公文書館)

§ 1. はじめに

宮城県石巻測候所は、1887年から1939年までの52年間存在した、宮城県の予算で運営されていた地方測候所である。地方測候所は各地方の気象観測・予報を行ったほか、災害発生時には現地へ測候助手ら職員を派遣し調査も行っていった。

1933年(昭和8年)3月に発生した昭和三陸地震津波の後にも、宮城県石巻測候所では職員を派遣し調査を行っている(一部地域へは中央気象台から派遣された測候技師が派遣されている)。その現地調査成果は中央気象台へ送られ、他県の測候所の調査成果とともに『験震時報』へ「宮城縣下津浪踏査概要報告」として掲載された。

今回、宮城県石巻測候所の活動を調査したところ、『験震時報』掲載の調査報告書と同様のものがほかに2点存在することが分かった。本報告ではこれらの調査報告書について紹介し、それぞれの特徴と違いについてみていくこととする。

§ 2. 宮城県公文書館蔵の報告書

宮城県公文書館に所蔵されている『昭和十年農事 農業』という資料には、宮城県石巻測候所の罫紙に書かれた「宮城縣下海嘯踏査概要報告」が綴られている。この報告書には宮城県石巻測候所長・野口篤美から宮城県知事・三辺長治宛ての文書が付いており、宮城県の組織としての報告書であったことが分かる。また、文書の日付が昭和8年3月10日付けであることから、地震後1週間以内にまとめられたものであることも読み取ることができる。

現在残っているのは第1班(鮎川・金華山方面)から第4班(気仙沼・唐桑方面)までのもののみ

である。第5班(閑上・荒浜・方面)・第6班(総合的調査)のものは存在していないが、これは『験震時報』に「迫て速報す」とあるように、調査成果をまとめるのに時間を要したため、3月10日には報告できなかつたものと考えられる。

§ 3. 国立国会図書館蔵の報告書

国立国会図書館に所蔵されている『宮城縣下に於ける三陸沖強震及津浪調査報告』には、『験震時報』・宮城県公文書館蔵と同様の各班の報告書が掲載されている。この『調査報告』の序文は昭和8年3月25日付けで野口測候所長から三辺県知事宛ての形となっており、「本縣下各地の實地踏査報告を綜合し取り敢へず本篇を印刷して大方の劉覽に供せんとす」と書かれている。これは宮城県公文書館蔵の報告書に、調査完了後「地震海嘯報告作成ノ上関係各廨及ビ一般ニ配布ノ予定」とされていた報告書に当たるものと考えられる。

この『調査報告』には、調査の際に撮影されたと思われる写真や県内各所の検潮記録が掲載されており、ここからも一般へ配布することを意識したものであったことがうかがえる。

§ 4. 各報告書の作成過程

以上のことから、宮城県石巻測候所で行った昭和三陸地震津波の現地調査成果は、宮城県および中央気象台へそれぞれ別途報告書を送付していたことが分かった。ただし、これらの報告書は速報としての位置づけであり、その後改めて国立国会図書館蔵の『調査報告書』が作成されていた。この『調査報告書』は一般の目にも触れられることが意識されたものとなっていた。

	金華山・鮎川方面		志津川町・歌津村方面			気仙沼方面						
	鮎川浜	鮫ノ浦湾	伊里前	名足	石浜	只越	鶴ヶ浦	宿	鮪立	小鮪	砂子浜	石浜
国会図書館蔵本記載の津波高(尺)	8	18	15	40	40	25	11	15	12	12	25~30	25
『験震時報』掲載の図	○	△	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×
宮城県公文書館蔵掲載の図	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
国会図書館蔵本掲載の図	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×

表 国会図書館本記載の主な地点の津波高と各報告書での図掲載の有無